

ものがある。

一、本文中では、原則として敬称・敬語は省略した。

一、度量衡は、実際に使用していた単位を用い、メートルに換算することは省いた。

一、図版・表には、各編ごとに通し番号を付した。

一、本文中、歴史用語として差別用語を用いた部分もある。これは時代の歴史的状態を正しく認識し、あるべからざる非人道的差別の解消に資するためである。

一、本文の執筆者、資料提供者、協力者、関係者名簿は、巻末に一覧で示した。

4

目次

第一編 原始・古代

序章 習志野市の地形と地質 3

習志野市の地形の特徴 3／台地の地層 4／低地の地層 7

第一章 旧石器時代 9

第一節 旧石器時代の生活舞台 11

気候 11／火山活動 11／動植物 13

第二節 石器の種類とその変遷 14

第三節 藤崎堀込貝塚の石器 17

第四節 旧石器時代の終幕と新文化への胎動 19

第二章 縄文時代 21

第一節 縄文時代のはじまり 21

土器の出現 21／弓矢と丸木舟 22

第二節 縄文土器と関東	23
年代の目盛としての縄文土器 23／土器様式とは 24	
一 関東の縄文土器の様式と変遷	24
草創期の土器様式 24／早期の土器様式 25／前期の土器様式 27／中期の土器様式 27	
後期の土器様式 29／晩期の土器様式 31	
二 縄文土器の形と文様	31
形式組成の変遷 31／物語性文様と紋の觀念 33	
第三節 縄文人の道具箱	36
石器 36／骨角器 38	
第四節 縄文時代の生業	40
多種多様な食料 40／狩猟・採集・調理・貯蔵の技術 41／貝塚 43	
第五節 住まいと集落	46
竪穴住居と定住生活 46／集落と縄文社会のしくみ 47／装身具と身分階層 52	
第六節 呪術と儀礼	54
第二の道具 54／葬送儀礼 56	
第七節 習志野市域内の縄文時代遺跡	58
市域にある遺跡 58	
一 藤崎塚遺跡	60
立地と調査 60／燃米文系土器 61／条痕文系土器 63	

二 花咲貝塚	63
立地と調査 63／条痕文系土器 64／羽状縄文系土器 66／竪島式土器 66	
三 藤崎堀込貝塚	66
遺構・貝塚 66／加曽利E式 67／称名寺式 67／堀之内式 72／加曽利B式・安行式 72	
石器 72／土製品 72	
第八節 縄文時代の終幕	72
第三章 弥生時代	74
第一節 稲作の始まりと弥生文化	74
一 稲作の伝来	74
農村の出現 74／稲作の系譜 74／弥生人の誕生 76	
二 弥生文化の成立と拡大	77
二つの文化圏 77／稲作の拡大 77	
第二節 弥生文化の展開	80
一 弥生時代の時期区分	80
弥生文化の範囲 80／弥生文化の変遷 80	
二 弥生土器の移り変わり	81
生活を支える道具 81／神まつりの土器 83	

第三節 弥生時代の生活と社会	84
一 多様な生業	84
稲作の位置 84 / 弥生人の一年 84 / 分業と交易 85	
二 住まいと社会	87
ムラの風景 87 / ムラとムラの交流 87	
第四節 弥生時代の墓と祭祀	89
一 農耕祭祀と祭器	89
農耕のまつり 89 / 青銅器の祭祀 90	
二 墓制と地域	90
様々な祭器 90 / まつりの変貌 92	
第五節 関東地方の弥生文化	93
一 前期の文化	93
独自の弥生文化 93	
二 中期の文化	95
農耕の定着 95 / 三つの文化圏 95 / 本格化する農耕社会 97	
三 後期の文化	98
農耕文化の多様化 98 / 地域文化の成立 99	
四 房総の弥生文化	99
農耕の定着 99 / 二つの地域 99 / 習志野の弥生時代 101	

第四章 古墳時代	103
第一節 前方後円墳の出現	103
一 古墳の成立	103
二つの中心 103 / 地域の交流 104 / 古墳の出現 105	
二 多様な古墳	105
様々な墳形 105 / 古墳の構造 109	
三 古墳分布の拡大	107
前方後円墳の分布 107 / 古墳とヤマト政権 107	
第二節 古墳文化の展開	108
一 古墳時代の変遷	108
古墳の時代 108 / 古墳時代の時期区分 110 / 古墳文化の展開 110	
二 土師器と須恵器の移り変わり	111
二種類の土器 111 / 赤焼きの土器 112 / 今来の焼物 112	
第三節 古墳時代のムラと生産・祭祀	113
一 開発と集落の拡大	113
開発と集落 113 / ムラの構成 113 / 豪族居館 114	
二 手工業生産の展開	115
専業工人のムラ 115 / 先端技術とヤマト政権 115	

三	古墳時代の神まつり	116
	海の祭祀 116 / 山の祭祀 117 / 神まつりの変貌 118	
第四節	房総の古墳文化	118
一	東日本の古墳文化	118
	東海地方と東国 118 / 倭五王の時代 119 / 埴輪と前方後円墳 120 / 古墳文化の変貌 121	
二	房総古墳文化の曙	122
	集落の変貌 122 / 円形墳と方形墳 122	
三	房総古墳文化の展開	126
	二つの総 126 / 上総と下総 127 / 常総型の古墳と土器 127 / 埴輪の盛行 129	
四	古墳文化の終焉	131
	大形古墳の造営 131 / 集落の変貌 131	
第五節	習志野の古墳時代	132
一	奥東京湾東岸の古墳時代	132
	地理的特質 132 / 海を臨むムラ 132 / 臨海の古墳 133	
二	習志野の古墳と集落	135
	竊沼A号墳 135 / 形象埴輪 135 / 円筒埴輪 135 / 竊沼B号墳 137 / 市内の古墳と集落 137	
三	埴輪と臨海の古墳群	139
	下総型埴輪 139 / 臨海の古墳群 139	

第五章	古 代	141
第一節	律令国家の成立	141
	ヤマト王権の東国進出 141 / 大化改新と東国国司詔 144 / 律令国家の成立と東国 145	
第二節	下総国の成立	146
	下総国の官衙 146 / 古代寺院の成立 148 / 国府と古道 150	
第三節	下総国千葉郡の人々	152
	人々の暮らし 152 / 房総の集落 155 / 古代東国の特色 158	
第四節	手工業生産の展開	160
	鉄の生産 160 / 房総の牧 161 / 物資の流通 162	
第五節	中世への胎動	164
	在地秩序の変質 164 / 東国の反乱 165 / 将門の乱・忠常の乱 168	

第二編 中 世

第一章	鎌倉幕府と下総の武士	171
第一節	平安末期の房総	171
一	両総平氏の成立と荘園・公領	171
	忠常の乱後の復興 171 / 開発と公領・荘園 172	

二	千葉氏の所領支配	174
	上総氏と千葉氏 174 / 所領支配の行き詰まり 176	
第二節	鎌倉幕府の成立と武士の動き	178
一	順朝の安房上陸	178
	源頼朝の挙兵 178 / 安房の順朝 178 / 順朝北上 181	
二	鷲沼付近での動き	182
	鷲沼の御旅館 182 / 藤原師経と菊田神社 184	
第三節	千葉氏の発展と武石氏	186
一	幕府草創期の千葉氏	186
	天下三分 186 / 奥州合戦 187	
二	武石氏の発展	189
	武石胤盛と奥州の亙理氏 189 / 千葉常胤の棟敷 189 / 武石氏と佐々木氏の婚姻 191	
三	武石関係の宝篋印塔	193
	箱根の「元興の河原」 193 / 箱根の宝篋印塔 194 / 傳宗被官としての結縁 196	
	仏岩の宝篋印塔 198 / 武石氏の開泰所領 201 / 武石氏入部の背景 203	
第二章	南北朝時代の展開と下総千葉氏	205
第一節	鎌倉幕府の滅亡と千葉氏	205
	後醍醐天皇の討幕計画 205 / 元弘の变と千葉氏 206 / 胤貞の所領譲与 208 / 鎌倉の攻略 209	
第二節	南北朝の内乱と千葉氏	210
	建武政権の崩壊 210 / 貞胤方と胤貞方の争乱 211	
第三章	室町幕府と鎌倉府	212
第一節	鎌倉府の成立と情勢の推移	212
	鎌倉公方と関東管領 212 / 鎌倉府の構造 213	
第二節	東国の争乱と千葉氏の動向	215
一	争乱の時代	215
	明德・応永の乱の様相 215 / 嘉吉・応仁の乱の様相 216	
二	上杉禪秀の乱と上総本一揆	217
	持氏の時代 217 / 上杉禪秀の乱 218 / 千葉氏の動向 220 / 上総本一揆 221	
	禪秀の乱の影響 222	
三	永享の乱と結城合戦	223
	永享の乱 223 / 結城合戦 225	
第三節	千葉氏の内紛	226
	東常縁の下総下向 228	
第四節	菊田庄の諸問題	228
	岩松氏と下総国 228 / 菊田庄と岩松持国本領所々注文 230	

第四章	戦国の北総と千葉氏	232
第一節	下総と武蔵の両千葉氏	232
一	下総千葉氏の家督の行方	232
	武蔵千葉氏の誕生 232 / 千葉氏内紛の終結 233	
二	千葉氏の本拠	235
	馬加城周辺の屋敷 235 / 馬加の社寺 237 / 千葉氏本拠地の変遷 238	
第二節	小弓公方と後北条氏	239
一	足利義明の小弓入部	239
	古河公方の内紛 239 / 当時の習志野 240	
二	後北条氏の房総進出	241
	北条氏の出現 241 / 第一次國府台合戦 242 / 第二次國府台合戦 244	
第三節	市域に活躍した武士	246
一	市域の人々	246
	在地の有力者たち 246 / 伝承の中の人々 249 / 三山の七年祭と高城氏 250	
	武石氏と千葉氏 252	
二	市域の城	255
	鷲沼城 255 / 実籾城 256 / その他の城跡 258	
第四節	中世千葉氏の終焉	259
一	北条氏の下総支配	259

	千葉氏と北条氏の癒着 259 / 天下の動き 260	
二	北条氏と千葉氏の滅亡	262
	千葉氏と小田原合戦 262 / 肥田家文書 263 / 文書の年代 266	
第五章	中世の信仰と文化	267
第一節	金石文から見た中世	267
	板碑 267 / 市域の板碑 268 / 五輪塔と宝篋印塔 273 / 菊田神社の棟札 275 / 御正体 277	
第二節	太子信仰と真宗	278
	津田沼・十王堂 278	
第三編	近世	
第一章	徳川幕府の成立と市域の村々	287
第一節	徳川家康の関東入国	287
	関東入国 287 / 家康とその子孫 289	
第二節	江戸幕府の成立	289
	征夷大将軍 289 / 幕府職制 290 / 評定所 292 / 農民統制 293	
第三節	市域村々の支配者	295

一	幕府代官	295
	市域の幕府領 295 / 幕府の代官 295 / 関東郡代 300 / 伊奈左門 303 / 近山と万年 303	
	大久保平兵衛 303 / 設楽勘左衛門 304 / 細井九左衛門 304 / 今井九右衛門 304	
	清野与右衛門父子 305 / 小野田三郎右衛門 305 / 中村八太夫 306 / 川崎平右衛門 307	
	羽倉外記 307 / 岩田敏三郎 308	
二	旗本大久保氏	308
	大久保氏の略系譜 308 / 松平外記の同僚殺害 310 / 大久保氏の知行地 311	
三	旗本金田氏	312
	金田氏の略系譜 312 / 金田氏の知行地 315	
四	旗本近藤氏	316
	近藤氏の略系譜 316 / 地頭法 317	
第四節	元禄の地方直しと新しい支配者	318
一	元禄の地方直し	318
	地方直し 318 / 市域の新しい支配者 319	
二	旗本西山氏	320
	西山氏の略系譜 320 / 西山氏の知行地 321	
三	旗本三沢氏	322
	三沢氏の略系譜 322 / 三沢氏の知行地 323	
四	旗本山崎氏	324
	山崎氏の略系譜 324 / 山崎氏の知行地 325	

五	旗本吉田氏	326
	吉田氏の略系譜 326 / 吉田氏の知行地 328	
第五節	市域の村々	329
	谷津村 329 / 久々田村 331 / 鷺沼村 333 / 藤崎村 334 / 大久保新田 334 / 実籾村 335	
	屋敷台新田 336	
第六節	前期村落の特質	338
一	村落の構成	338
	近世村落の成立 338 / 領主の村支配と村役人 340 / 五人組 341 / 村定・村議定 342	
二	家族の構成	343
	近世前期実籾村の家族構成 343 / 半檀家 345	
三	前期の争論	346
	慶長の野論 346 / 元禄の野論 347 / 延宝の道一件 347	

第二章 年貢と諸役

第一節	年貢の割付	349
一	本途物成と雑税	349
	領主と農民 349 / 本途物成 350 / 雑税 351	
二	厘取と反取	352
	厘取 352 / 反取 354	

三	検見と定免	355
	検見 355 / 定免 358	
第二節	年貢の皆済	360
一	幕府領の皆済	360
	谷津村新田の皆済 360 / 久々田村の皆済 363	
二	旗本領の皆済	366
	大久保氏の皆済 366 / 山崎氏の皆済 368	
第三節	村々の年貢	372
一	栗畑村の年貢	372
	旗本近藤氏の時代 372 / 幕府領の時代 373 / 山崎氏の時代 373	
二	大久保新田栗畑村分の年貢	376
	延宝一頁享期の年貢 376 / 元禄期の年貢 377 / 宝永期の年貢 378	
三	藤崎村の年貢	379
	明和期の年貢 379 / 天保期以降の年貢 381	
四	谷津村の年貢	382
	文化五年の年貢 382 / 天保期の年貢 382	

第三章 小金牧

第一節	牧の成立と移り変わり	384
	江戸幕府直営の牧場 384 / 享保期の牧場支配 387 / 寛政期の牧場支配 388	
	幕末の支配替え 389 / 牧場関係の役職 388	
第二節	小金牧と周辺村落	392
	周辺村落の負担 392 / 周辺村落の対応 396	
第三節	將軍の鹿狩りと村々	397
一	將軍の狩猟	397
	鹿狩りと鹿狩り 397 / 生類憐みの令と狩猟 398 / 狩猟の復興 398	
二	享保期の鹿狩り	399
	享保一〇年の鹿狩り 399 / 享保一一年の鹿狩り 401	
三	寛政期・嘉永期の鹿狩り	402
	寛政七年の鹿狩り 402 / 嘉永二年の鹿狩り 403	
第四節	小金野鷹場と村々	405
	捉飼場と鷹場関係役人 405 / 捉飼場と村々 408	

第四章 江戸湾の漁業

第一節	漁業の始まり	410
	江戸湾の地理的環境 410 / 江戸湾と江戸前 411 / 江戸湾の漁業と関西漁民 412	
	御葉浦の設定 414 / 御葉浦船橋浦 417	

第二節 内湾漁村と漁業	419
一 内湾漁村とその漁業	419
江戸内湾漁業 419 / 市域の海付村々の漁業 421	
二 貝 漁	424
貝種と採取法 424 / 貝漁の規定 425	
三 イカ網漁	427
新しい漁法の開発 427 / イカ網漁の広がりとお付藻の供給 428 / イカ網漁の規定 429	
第三節 漁場をめぐる争い	431
一 漁場争論と幕府の対応	431
漁場争論の発生 431 / 幕府勘定所の漁業権調査 432 / 調査の結果 433	
二 市域の村々での争論	434
市域での漁業争論 434 / 久々田村一件 436 / 漁師と農民 437	
三 村々の対応策	438
神奈川会合と内湾漁村 438 / 内湾漁業の特質 439	

第五章 交通・通信

第一節 近世の交通	441
一 江戸幕府の交通政策	441
五街道と脇往還 441 / 宿駅と助郷 443	
二 房総の街道	445
他国に通じる街道 445 / 房総半島への道 446	
第二節 陸上交通の展開	448
一 東金街道	448
徳川家康鷹狩りの道 448 / 街道の造成 449 / 馬糞ぎ一件 452	
二 房総往還道	453
房総半島への道 453 / 房総往還道の旅日記 454	
三 馬加村・船橋宿への助郷	455
馬加村の助郷 455 / 船橋宿の助郷 459	
第三節 海上の交通	460
一 舟運とその統制	460
初期の舟運 460 / 江戸内湾の漕 461 / 幕府の舟運政策 462	
二 江戸内湾の舟運	463
市域の河岸 463 / 佐倉藩の御用河岸 465 / 木更津船 466 / 内湾渡船の実態 468	
第四節 海難救助	470
江戸幕府の海難政策 470 / 検見川海難船一件 471	

第六章	幕府政治の再編	473
第一節	幕府改革	473
一	享保の改革	473
	八代將軍吉宗 473／勘定所機構の整備 474／年貢増徴政策 475／足高の制 477	
	法令の整備 478	
二	寛政の改革	479
	田沼の政治 479／松平定信 480／旧皇帰農政策 481／西米 482／人足寄場 482	
第二節	幕府代官と風俗取締り	484
一	風俗取締りの幕府法令	484
	風俗取締り 484／神事祭礼 485／初物好みの禁止 486	
二	関東取締出役	486
	相給村落 488／関東取締出役 487／組合村の設置 488	
第三節	旗本財政の窮乏	489
	大久保氏の財政 489／山崎氏の財政 491／吉田氏の財政 492	
第七章	近世中期の村々と人々の生活	493
第一節	享保期の新田開発	493
	享保期の新田政策 493／寒花新田 493／名耕地新田 496／谷津村新田 497	
第二節	村の政治	497
	村役人と村方騒動 497／村の財政 499／市域と村方騒動 501／谷津村一件 501	
第三節	諸産業と流通	503
	耕地の条件 503／サンマイモの伝播 504／薩摩芋一件 504／文政二年の一件 506	
	天保一〇年の一件 507／薩摩芋一件と天保の飢饉 508／たばこ、西瓜の生産 510	
	金肥の購入 511／塩生産と薪 511	
第四節	後期の家族構成	512
一	家の普請	512
	農民の住宅 512／鶴田家住宅 514／家の普請 515	
二	実籾村の家族の構成	516
	実籾村の人口史料 516／近世後期実籾村の家族構成 516／奉公人 518	
三	村の女性とつきあい	522
	近世の女性 522／村のつきあい 526	
第五節	「渡辺東淵雑録」に見る世相	528
	外国舶来航 528／災害と飢饉 529／物価の変動 529	

第八章	庶民の信仰と文化	531
第一節	近世の寺院	531
一	江戸幕府の仏教政策	531
	幕府の仏教統制 531／本末制度の確立 532	

二	檀那寺と檀家	533
	キリシタン禁教政策 533／宗門改め 534／檀家をめぐる争論 535	
三	市域の寺院	535
	新義真言宗の寺院 536／東福寺 537／西光寺 538／延寿寺 539／東漸寺 539／慈眼寺 540	
	正福寺 541／無量寺 541／観音寺 542／修験道 542	
第二節	近世の神社	544
一	江戸幕府の神道政策	544
	幕府の神道新制 544／神社管領長上の吉田家 545	
二	総鎮守・船橋の二宮神社	546
	三山の七年祭 546／神宮寺と不法出入り 547	
三	市域の神社	548
	市域の神社 548／丹生神社 549／菊田神社 549／根神社 550／八剎神社 550／子安神社 551	
	大原神社 551／八幡神社 551／天津神社 552	
第三節	様々な信仰	553
一	信仰と代参詣	553
	代参詣 553／大山講 553／成田講 555	
二	出羽三山信仰	557
	出羽三山 557／霞場と檀那場 558／市域からの登拝 559／出羽三山への道 562	
三	富士信仰	563

	禁止された富士講 563／御師と檀家 565／富士山への道 567	
四	信仰と旅	569
	旅したく 569／道中日記 572／天竜川事件 573	
五	民間信仰	574
	抱道神 574／庚申講 574／馬頭観音 575／道祖神 575／十九夜講 575／子安講 576	
第四節	地域文化の発展	576
一	寺小屋と私塾	576
	江戸時代の教育 576／寺小屋 578／私塾 579	
二	文化人・渡辺東淵	580
	渡辺東淵の出自 580／渡辺東淵雑録 580	
三	俳諧と相撲	582
	俳諧のなかの雑俳 582／相撲年寄宮城野馬五郎 583	

第九章 幕藩体制の崩壊と市域の村々

第一節	天保期の幕政と市域の村々	585
一	天保飢饉と市域の村々	585
	天保四年の大嵐と凶作 585／天保七年の凶作と米価高騰 587／不安定な物価と門訴事件 589	
二	天保の改革	592
	改革政治の始まり 592／対外的危機と改革の挫折 593	

三	印旛沼掘削工事	595
	工事の準備 595 / 工事の実施 597 / 工事の縮小と中止 599	
第二節	海防政策の展開	601
一	寛政期以降の江戸湾防備政策	601
	江戸湾防備と松平定信 601 / 江戸湾防備政策の推移 603	
二	ペリ来航と内海警備	608
	ペリ来航 608 / 内海警備の強化 610	
三	ペリ来航と市域の村々	614
	治安の維持 614 / 村々の負担 618	
第三節	幕末期の政治・社会情勢	620
一	安政期以降の幕政	620
	開国と安政期の政局 620 / 公武合流派と尊攘派の対抗 623 / 攘夷から討幕へ 625	
二	市域の村々の情勢	625
	物価高騰と地震・台風 628 / 幕府の崩壊 629 / 自衛する市域の村々 632	

第四編 近現代

第一章 近代国家の形成と市域

第二節	村から町へ	637
一	維新と村々	637
	維新期の混乱 637 / 新政の開始 638 / 大区・小区制の編成 639 / 村の財政 640	
	道路の整備 642 / 陸軍の視察 644 / 藤崎村の人々 645 / 動く人々 646	
二	津田沼村の成立	647
	町村制と津田沼 647 / 政治的なめざめ 649 / コレラの蔓延 650 / 御猟場の設定 651	
	地域の様子 653	
三	津田沼町の成立	655
	町政の施行 655 / 町の行・財政 656 / 県議・田久保節造の活動 658 / 兵營と地域 659	
	社会の様相 660	
第二節	明治期の産業	663
一	地租改正	663
	壬申地券の交付 663 / 土地の丈量 664 / 地位等級検査 666 / 山林の地租改正 668	
	地租改正の終了と結果 669 / 土地所有の状況 669	
二	農業	671
	明治初年の農業生産 671 / 『偵察録』に見る市域 672 / 明治後期の概要 674	
	農家の一年 677 / 塵芥の利用 682 / 地主小作の展開 683	
三	漁業と塩業	685
	維新後の漁業 685 / 漁業組合の展開 687 / 塩田開発 688 / 塩田の実態 689	
	塩ができるまで 690 / 塩業試験場の設置 692 / 試験内容 692 / 試験場の再開 693	
	試験場の移転 694 / 塩田跡地利用 694	

四	商工業と金融業	695
	初期の商工業 695 / 商工業者の概要 695 / 船運と船 699 / 明治期の金融業 699	
	津田沼商業銀行 700 / 済民貸金合資会社 700	
第三節	総武鉄道の開通と地域社会の変貌	704
一	総武鉄道の開通と津田沼駅	704
	総武鉄道の設立 704 / 津田沼駅の開設と貨客輸送 705	
二	船倉鉄道の出願と房総鉄道の路線延長	708
	船倉鉄道の出願 708 / 房総鉄道の路線延長計画 708	
三	総武鉄道の船橋・佐倉間及び津田沼・大久保新田間の路線延長計画	709
	船橋・佐倉間の路線延長計画 709 / 津田沼・大久保新田間の路線延長 710	
四	総武鉄道の国有化と京総電気鉄道の出願	712
	総武鉄道の国有化 712 / 京総電気鉄道の計画 712	
第四節	教育と宗教	715
一	寺小屋から小学校へ	715
	明治初年の寺小屋 715 / 学制による小学校 717 / 小学校教育の実態 718	
二	小学校の定着と矛盾	722
	明治中後期の学校 722 / 鷺沼の新校舎と記念事業 723 / 新築をめぐる放火事件 725	
	大久保での小学校設置運動 727 / 学校統合への鷺沼の反撥 731	
三	社会教育の試行	732

津田沼文庫と社会教育団体 732

四	社寺の統廃合	733
	藤崎村の社寺地の上知 733 / 社寺地の払下げ 735 / 継承される諸組織 735 / 神社の合併 738	
第五節	軍隊の進出と習志野	740
一	騎兵部隊の進出	740
	習志野原と騎兵 740 / 設置の経緯 744 / 日露戦争とその後 747 / 騎兵学校 750	
	戦車第二連隊 755	
二	廠舎と病院	759
	高津廠舎 759 / 練馬廠倉庫 763 / 習志野衛戍病院 768	
三	鉄道連隊の創設	770
	日露戦争と鉄道連隊 770 / 鉄道連隊の創設と発展 772 / 鉄道第二連隊の演習と活躍 774	
	鉄道第一・第二連隊の主な戦績 774	
四	捕虜収容所	780
	日露戦争後の捕虜収容所 780 / 第一次大戦後の捕虜収容所 783	

第二章 軍郷習志野の発展 787

第一節	町と村の行財政	787
一	大正期の町勢	787
	肥大する行政 787 / 多様な行政 788 / 町の財政 789 / 人口と職業 793 / 相次ぐ災害 795	

二	自治区の活動	797
	自治と行政 797 / 久々田の区政 798 / 区の土木事業 800 / 衛生問題 801 / 選挙への関与 802	
三	町政の混乱	803
	昭和四年の町議選と町長 803 / 町政の問題点 805 / 競馬場設置問題 807	
	町長・助役選出問題 808	
四	発展する軍郷	810
	ベッドタウン化 810 / 町の行財政 811 / 生活環境の改善 813 / 準戦時下の津田沼 815	
	戦時下の世相 817	
第二節	大正昭和期の産業	818
一	農業	818
	土地利用の変化 818 / 農家戸数の変化 819 / 米と麦 820 / 野菜生産 822 / ホウレンソウ 824	
	軍と農業 826	
二	水産業	827
	大正期の漁業戸数調査 827 / 漁業組合長の日記から 828 / 昭和期の漁業生産 829	
	昭和一〇年代の漁業組合 830 / 海苔養殖の開始 832	
三	商業	832
	軍隊と商業 832 / 年賀広告に見る商家 833 / 営業税の史料から 834 / 高名商工店家案内 835	
	生活必需品商業組合 837	
四	工業	839
	津田沼町の工業生産 839 / マッシユルムと伝話 842 / 習志野第一マッシユルム園 844	
	篠原機械製作所の進出 848 / 田中航空機器製作所 851 / 海草バルブ工場反対運動 852	
第三節	習志野町の発展と京成電気軌道	854
一	京成電気軌道の創立と電灯・電力供給事業	854
	京成電気軌道の創立 854 / 電灯・電力の供給事業 855	
二	京成電気軌道の開業と千葉線・成田線	859
	千葉線の延長請願 859 / 千葉線の総武線への影響 860 / 鉄道院運輸局の調査結果 863	
	成田線の敷設をめぐって 865 / 高津新田停留所の設置請願 867	
三	谷津遊園の経営と土地分譲・自動車事業	867
	谷津遊園と谷津支線 867 / 土地分譲と自動車事業 870	
四	谷津遊園と阪妻プロダクション・読売巨人軍	872
	阪妻プロダクションの開設 872 / 読売巨人軍の誕生 875	
五	津田沼駅と国鉄総武線	875
	津田沼駅の概況 875 / 武総海岸鉄道の出願と却下 877 / 関東大震災と津田沼鉄道連隊 878	
	総武線の電化 879	
六	民間航空の発祥と伊藤飛行機研究所	880
	民間航空の発祥地・稲毛海岸 880 / 伊藤飛行機研究所の設立と経営 883	
	伊藤飛行機株式会社の設立 889	
第四節	教育と宗教	891
一	大正期の学校と教育	891
	津田沼尋常高等小学校 891 / 出席率の低下への対策 891 / 学校と社会のつながり 894	
	郷土教育資料の編さん 895 / 関東大震災と学校 896 / 長作小学校の購買組合 897	

幼稚園の設置	300
二 中等教育への模索	309
「大正義人」の吉野茂助 309 / 中学校ではない「中学館」 301 / 大正学館の事態 303	
大正学館の生徒 305 / 正福寺の弘文学校 307	
三 高等教育機関進出計画と習志野体育奨励会	308
高等教育機関進出の気運 308 / 学校教練施設への転用 310 / 習志野体育奨励会の概要 312	
戦後の習志野体育廣舎 313	
四 社会教育の定着	314
青年会 314 / 皇座をめぐる社会教育 316 / 多彩な取組み 317 / 軍郷としての社会教育 318	
国民精神作興と戦時下生活 318	
五 信仰の継承と変化	319
二宮神社の七年祭 319 / 葬儀の改良と寺院 321	
六 戦時下の教育	321
津田沼青年訓練所の設立 321 / 津田沼農業補習学校の遷れ 322 / 津田沼青年学校 323	
私立青年学校の創立 323 / 小学校行事の変容 325 / 大久保国民学校の独立 327	
第五節 軍国化の波と習志野	328
一 陸軍習志野学校	328
第一次大戦後の変質 328 / 習志野学校の設立 331 / 機構と活動 333 / 研究活動 335	
学生教育 337 / 教導活動 340 / 歴史のおわり 343	
二 軍国主義時代の習志野	345

演習場に見られる変質 345 / 首都圏防空演習 345 / 地域と陸軍機関との交流 348

第三章 戦後改革と市域の変貌	357
第一節 戦後の町政と市制施行	357
一 町政と世相	357
占領と武装解除 357 / 買い出し 359 / 引揚者の生活 360 / 民主化の動き 362	
労働運動の勃興 363 / 町政の改革 364 / 町政の展開 366 / 町民の職業 367	
二 市制施行	368
合併への動き 368 / 松橋との交渉 369 / 三町村合併協議会 370 / 分町合併へ 372	
豊かな可能性 374	
第二節 教育	376
一 新しい学校の創設	376
戦後の教育改革と津田沼小学校 376 / 小学校の増設 378 / 中学校の用地獲得 378	
高等学校の設置 380 / 保育所・幼稚園と各種学校 381	
二 高等教育機関の進出	381
東鴨経済専門学校に移転 381 / 千葉工業大学の移転 382 / 東邦大学の移転 383	
三 社会教育の展開	384
文教住宅都市靈草 384	
第三節 農地改革と諸産業	385

一	農地改革	985
	改革の開始 985 / 土地の買収 986 / 異議申立て 987 / 管理換え 988 / 売渡し 988	
二	産業の変化	989
	習志野原の開拓 989 / 賠償指定工場 992 / 昭和二〇年代の産業 992 / 市制施行後の産業 994	
第四節	地域社会の発展と交通網	997
一	新京成電鉄の設立と経営	997
	京成電鉄の旧演習線への着目 997 / 下総電鉄の設立計画 998 / 新京成電鉄の創立 1001 建設工事の開始 1002 / 新津田沼・薬園台間の開業 1002 / 新京成新津田沼駅・京成津田沼 駅間の路線建設 1004 / 前原・新津田沼駅間の路線延長計画 1005 / 新津田沼駅の移転 1008 高根木戸団地の誘致 1011	
二	都市化の進展と交通網の整備	1012
	国鉄総武線の輸送力増強 1012 / 京成電鉄の沿線開発と通勤・通学輸送の増大 1015 バス路線網の拡大とタクシー事業 1015 / 谷津遊園の盛衰 1019	
第五節	公営事業の展開と市政	1020
一	公営事業	1020
	市営水道 1020 / ガス採掘権の獲得 1022 / ガス事業の発展 1023 / 企業局 1024	
二	市政の展開	1025
	合理化・機械化の進展 1025 / 企業誘致と埋立て 1026 / ゴミと屎尿 1027 市政への関心の高まり 1028 / 高度成長のなかで 1028	

第一編 原始・古代